

故つ川にしては、番匠川は何の抵抗も示さず黙して語らない。そればかりか、長島川や中江川の主流では、外れの時水場になつたやうな、台風時の船舶の避難場所として使用され、なすてはならぬ存在であるではないか。

先日、今後の佐伯市発展の功労者は、この番匠川を一番に推荐したいと思ふのであるが、いかかやまふであるか。秋の文化勲章等の叙勲の項になるとこんなことを思う。今後デルタ地帯に工場地帯を造るなり、住宅地にするなり、道路を敷いても番匠川自身も拵々ほしなないであらう。が川自身の本心といふか、自然の姿が何んであるかを謙虚に見きわめて、工事としないといふごんな形が分らないか。大自然の鉄槌が下ると云ふことは知つておかぬはならない。

第二章佐伯港を少し長らしく書き続けまして私にこゝで結ぶの言葉を書いて、しばらく休息したいと思ふ。佐伯港の働きを十分に發揮するに及ばぬ、港灣施設の近代化と道路網整備の一言につきるであらう。ただその際、束まれた港灣の自然的條件と後背地の山野を育みながら貫流している番匠川の爲してきた働きを理解し、感謝して、しかる後に人の世の住みよき地域はどんな所かを工夫をこらすすが、生きていく私達の努であらうかと思ふ。

(この項終り)

研修記

三重町に文化財を学ぶ

弥生町文化財調査委員
本会委員 伊 賀 重 雄

十一月六日、七日、県教育委員会主催「文化財指導者研修会が三重町で開催され、私達も出席したので会員の

皆様にその状況と報告致し度いと思ひます。

第一日は別府大宮自井先生の、金石文の比較研究のお話があり、数十枚の大型写真による説明と、石塔の分類等々、塔碑研究には缺かせない貴重なお話でした。ついで元辨薬師学校入江先生の民俗資料についてのお話があり、平城宮より出土した一般庶民のもの、宮廷のものよりお話が民俗資料の定義、考古学との関連性、収集について心得等、歴史学としては一審新しい学問であるから、これからが大事であるとお話。

午後四時すぎ両先生のお話がすま、三重町教育委員会による「三重町の文化財」をスライドにより公民会主事の説明で紹介していただいたが、注目したいのは古墳の多いことと、出土した器物が完全に保存されていることである。

三重町字佐、国東につづいて文化財の多い処、ここに生を享け、三重の風土の中に立派に成長された旧知の中に、二人の故人土生米作先生、伊藤乙人先生を挙げたい。私は特に本会員の中で両先生に対し面識の深い所で、さしぬる八月伊藤先生が遊かれ、一か月経たぬ内に土生先生がみまかり、私の胸の中には大きな空洞が生じて仕舞つた。両先生と初めてお会いしたのは七年前、研修会が宇佐神宮で開催された時、たまたま同室で両先生の御人格の立派さに打たれ、それより御交際をお願ひして今日まで文通をつづけて来たおかげで、三重町の第一級の人を失つた感じが一パイです。三重町の文化、文化財を語るには、このお二人を除外しては意味がないと極言してまいと思ひます。茲につづいて両先生の御冥福をお祈り致し度いと思ひます。

スライド映写がすま、宿舎の三國屋旅館で夕食をいただき、夜は商工会青年部の演じる三重神楽を見学して、

旅の一夜をたのしんだ。

第二日は現地見学で、午前九時より三重内山蓮城寺及び観音堂を訪れ、紅葉の内山溪谷を散策。秋深き長有堂のたゞずまい、修理なつた千軒観音堂など見て、つぎに松尾山にある吉祥寺に大蔵徳明王像を拝観する。

松尾山は天正年間、島津義久がこれに据り大友軍に對した古城の跡で、養久が退軍の時火を放ち、堂塔これが大灰燼に歸したと史書に伝えられて居る。私はこの松尾を訪れるのは今回が始めてで、三重郷のうちで未知であつた。松尾の松籟の中で天正の昔としのび、つおものおおれを止めるこの城跡と、光琳の制作と云う蘇絵の視察が、革深い松尾の山里に大事に保存されている。

それから市辺田八幡、菅尾石仏と見学したが、こちらに佐伯史談会は何回か見学しているのので、ここでは割愛したい。

菅尾石仏の見学を終つて、県北方面や県南に帰る人達とお別れして、私達は三重所にとつてかえり、同郷の親友で三重労働基準監督署の課長をしてゐる赤矢定茂君を訪ねて、同氏の車で佐伯に帰ることにして、同氏の心づかいの晝食をいただき、紅葉の用件公園と普光寺石仏を訪ねて見ようではないかと話かきまり、車は赤矢氏が提供、同行は市野瀬先生、佐伯市教委の加藤主事、五十川千代見氏と私へ談以上本会委員、そして赤矢氏。

まづ先づ今日見落りの内山浮雲寺のつづじ園並に古塔など見学した。この浮雲寺は私の菩提寺西蓮寺とは開祖が同一人で、益可先生が編んだ「西蓮寺暮伝」に記載されてゐる。廣い庭、特に裏山をたく及び入り入れた造園は雅緻な左るまゝがある。同寺の若奥様は市野瀬先生が同東高校在職中の教え子の由にお互い心その昔遊に驚

く。そこで奥様の心づくしのお茶をいただきつつ談、午後二時同寺を辞去。一路用件を自指し車と走り午後三時羊到着、夕陽に映える楓林の池畔を逍遙、その雅趣を嚆嘑、市野瀬先生はこの野趣と殊の外共び、即興の漢詩を朗吟して遊子にその美声をきかせる。私も詩趣豊かな用件池畔に

もみじ葉の七分なりたる楓林は
人つどい居てうたよめくも
おさな子のあかき手のひら見るごとく

用件池畔を終り、普光寺の磨崖石仏を見学は少く、今春三月、雨の日に一度調査にきたことがあり、大神氏の大野川流域に於ける史料が左めの一冊として、貴重な存在と見ている。春訪ねた時に居られた住職は不在で、よく見るとどうも無住の寺になつてゐるようだ。過疎の波もここまで寄せて来てゐると思つた。

見学を終つたのが五時すぎ、折角ここまで来たのだから、今春果せなかつた竹田市羽恵在の親族をたずね、十年來の久淵を謝しお互いに健在を喜び合ひ、記念に箱根百合を頂戴して辞去し、一路佐伯に向つて帰路につき、八時過ぎ帰着した。

いつも変らぬ赤矢氏の友情と厚意に感謝し、敬びつていみじくよい見学を、新しい又人間関係の出来左ことを花を合つてゐる姿を見て、よい研修の旅の出来左ことに満足してゐる。但し文章前後不揃ふよらぶらゐい点ご勘弁を乞ひたい。

(本寺正誤) 12ページ下段 最初一月とあるは十二年十一月と訂正すべし。四六、七段は寛永十一年(一七三四年)十一月、菅尾石仏の修葺は

二年三月以後の事係存存三月と訂正すべし。菅尾石仏の修葺は